

「教養学部」であるために

—新型コロナウイルス関連YouTube動画作成、及びBS231放送番組制作の実践報告を起点に—

大橋理枝¹⁾

Alliance as a Requisite for the Faculty of Liberal Arts: Insights from creating a YouTube series and a TV program on COVID-19

Rie OHASHI

要旨

2020年春に生じた新型コロナウイルスの世界的流行に際し、教員の専門性に基づいた学術的な内容を放送大学から発信するために、5月に「新型コロナウイルス流行の中で～放送大学教員からのメッセージ」と題した一連のYouTube動画を作成・配信した。また、7月にはBS231チャンネル放送用のテレビ番組「新型コロナウイルス流行を越えて～放送大学教員の視点」を制作し、8月から9月にかけて放送した。本稿ではこれらのコンテンツの制作過程を明らかにすると共に、それが分野を超えた様々な人の協力があって始めて可能であったことを示し、教養学部であるために必要な学内連携の在り方について考察する。

ABSTRACT

In an effort to disseminate a message from OUJ based on the academic knowledge of its faculty members in response to the Covid-19 epidemic in the spring of 2020, a series of YouTube videos entitled "In the Midst of the New Coronavirus Epidemic: Messages from faculty members of the OUJ" was delivered in May. In following the move, a TV program entitled "Going beyond the Covid-19 Epidemic: Perspectives of faculty members of the OUJ" was produced and broadcast on BS231 between August and September. This article reports on the process of creating these contents, delineates the significance of cooperation between various people from many sectors within the university in completing the projects, and reflects upon the essential intramural alliance for a liberal arts college.

1. はじめに

2020年春からの新型コロナウイルス流行に関する対応の一つとして、教員有志によるYouTube動画シリーズ「新型コロナウイルス流行の中で～放送大学教員からのメッセージ」を配信すると共に、生涯学習支援番組「新型コロナウイルス流行を越えて～放送大学教員の視点」を制作した。これらは新型コロナウイルスの流行という前代未聞の事態に際して放送大学から世間に向けて教員主体の発信を行ったという点で意義のあるものだったと考える。しかし、これらの発信は、学内で様々な部署の分野横断的な協働・連携があっ

はじめて可能になったものである。本稿ではこれらのプロジェクトに関してどのような協働・連携があったのかを記録することを通して、教養学部としての放送大学にとって学内でどのような連携が必要なのかを考える。

2. 事の発端

2020年度第1回の生涯学習支援委員会と放送番組編成制作委員会は4月8日(水)に開催された。放送番組編成制作委員会で予定されていた議題の一つとして、2020年度第2学期放送番組編成計画案についての説明と審議がなされると共に、「新型コロナウイルス

¹⁾ 放送大学教授 (「人間と文化」コース)

感染症対策に関する編成対応について」の説明があった。その際委員から「社会的なニーズに則って、場合によっては再放送に限らず、新規制作も検討すべき」との意見が出たことが議事録に記されている。

周知の通り、現在放送大学ではBS231とBS232という2つのテレビチャンネルを持っており、BS232チャンネルでは学修カリキュラムに沿った授業番組を、BS231チャンネルでは単位取得に関わらない講義番組とBS232チャンネルで放送した番組の再放送を、それぞれ放映している。BS232チャンネルで放送される番組は各コース・プログラムから提案されたものが教務委員会で最終決定されるが、BS231チャンネルで放送される番組は企画提案が生涯学習支援委員会に出され、そこで内容を審議した後に放送番組編成制作委員会で予算面が審議され、両委員会で承認されたものが制作・放送されるという段取りになっている。放送番組編成制作委員会ではBS231チャンネルの編成計画も審議されることになっているが、放送番組の編成は毎年5月と9月に開催される放送番組委員会での了承を経なければならないため、実際の放送時期よりかなり前の段階で決めておくのが通例となっている。このことは即ち、BS231チャンネルで放送する番組は約半年前に決まっていることを意味している（2019年2月6日付の2018年度第2回放送番組編成制作委員会資料2では、2020年度1学期編成計画と放送計画は2019年9月末の放送番組委員会で検討されることになっている）。

このような状況に対し、新型コロナウイルスの流行という前代未聞の事態に際して、放送大学からもこの時機に何か発信することが放送大学のプレゼンスを高めるために意義があるのではないかと、そのためには今学期の番組の編成を変えることはできないのか、という意見が委員から出たのが、先の議事録に記されている発言が出る前の文脈だった。しかしながらこの意見に対しては、今学期の番組編成は半年前から決まっていること、並びにウイルス感染と最も関連の深い授業番組である「感染症と生体防御（18）」は生憎ラジオ科目であるためテレビチャンネルでは放送できないことが確認された。そのため、「新型コロナウイルスの流行に際しての放送大学からの発信」というアイデアを実現できる方法はないように思われたのだが、その中で出て来たのが、議事録にも記された「社会的なニーズに則って、場合によっては再放送に限らず、新規制作も検討すべき」という意見だった。

議事録に発言者は記されていないが、この文言は筆者の発言を記録したものと理解している。放送番組編成制作委員会は生涯学習支援委員会の後に開催されるため、この日は当初予定の時間を延長して行われていた。初のオンライン会議であった上に時間延長となり、もはや12時半になろうとしている中で、ダメ押しのように実現可能性が極めて少ないことを意見として述べてしまった、という思いは、筆者の中で何かできることはないだろうか考える大きな原動力となった。

3. YouTube動画作成まで

3.1 背景

4月7日に安倍首相によって緊急事態宣言が発出されたことに伴い、テレビの情報番組は連日新型コロナウイルスの流行について特集を組んだ。それらを横目で見ながら筆者が感じていたのは、そこで取り上げられる情報がごく一部の観点から見たものにとどまっているのではないかということだった。ウイルス感染の仕組みが分かればこそ、感染を防ぐための行動指針も納得できるはずではないのか。まるで流行言葉のように語られ始めた「ソーシャル・ディスタンス」は、感染を防ぐためには確保することが必要だが、その結果として私たちの他人に対する距離感そのものに影響を与えるのではないかと（コミュニケーション学を専門とする立場からは絶対に影響があると思われるにも拘わらずこの点は十分に論じられていないという思いもあった）。その他にも様々な観点からの検討が可能はずなのに、その多角性が見過ごされているように感じられた。一方、既にこれだけ情報が出ている中で発信を行うのであれば、この多角性にこそ放送大学からの発信を行う意味があると思った。そこで、全てのコースから教員一人以上に参加してもらい、聞き手役との対談の形で、それぞれの専門分野の立場から新型コロナウイルスの流行について話してもらおう、という形を考えた。

放送番組編成制作委員会で新規制作も検討すべきと発言した以上、生涯学習支援委員会に番組提案を出すべきではないかと思ったが、テレビ番組の制作にはかなりの時間がかかるため、今回の新型コロナウイルス流行に合わせたタイミングで番組を制作して放送するのはまず無理であろうことは想像に難くなかった。そこで、放送大学YouTubeチャンネルに動画を流すことを思いついた。これまでも授業番組の科目紹介をYouTube動画で流していたのは知っていたので、そのメディアを活用できないかと考えたのだ。今回の新型コロナウイルス流行に際して放送大学から何かしらの発信を行うなら、比較的短時間で制作から配信までもっていけるYouTube動画が最も適切なメディアであるように思われた。また、費用的な面でも、大学に大きな負担を掛けずに実現できると考えた。

この頃は他人との接触を8割減らすことが望ましいとされており、収録に際して全員が一度に集まる形は避ける必要があった。一方、Zoomには録画機能があることが分かっていたため、これを活用することを思いついた。対談を行う2人がそれぞれ別の場所からZoomに接続し、対談を録画して若干の編集を加えれば、YouTubeで配信可能な程度の動画はできるのではないかと。そこで、生涯学習支援委員会委員長に非公式な形で提案を持ち掛けてみた。

3.2 手続き

後から分かったことではあったが、これまで放送大学YouTubeチャンネルで配信してきた動画は科目紹介や大学の窓が殆どであり、今回のように放送大学YouTubeチャンネルでの配信のために動画を作成したことはなかった。また、放送大学YouTubeチャン

ネルの位置づけも、一度テレビで流した番組を後から配信するという形が専らだった。凶らずも今回の企画は放送大学にとって前代未聞のものとなっていたため、事務手続きは紆余曲折を含んだものとなった。下に筆者の目から見えた事柄を整理しておく。

【4月8日】 2020年度第1回生涯学習支援委員会及び放送番組編成制作委員会	「社会的なニーズに則って、場合によっては再放送に限らず、新規制作も検討すべき」と発言
【4月12日】 メール	生涯学習支援委員会委員長に放送大学YouTubeチャンネルでの動画配信の企画を内々に提示
【4月21日】 生涯学習支援委員会関連事務打ち合わせ	生涯学習支援委員会は生涯学習支援番組を審議するための委員会であり、YouTube動画の審議は対象外との指摘 →刻々と状況が変化しつつある新型コロナウイルスの流行に際して発信するためにはテレビ番組を企画しては間に合わないため、「緊急性に鑑みて今回はテレビ番組の制作より先にYouTube配信を行うという形を認めてほしい」という形に修正した形で企画提案書を提出（この段階で放送大学YouTubeでの動画配信に加えてテレビ番組制作が既定路線化）
【4月27日】 メール	YouTube動画配信のみの企画なら制作部はどのように関われば良いのか？との問題提起
【4月28日】 生涯学習支援番組アドバイザーグループ会議	追加説明の別紙を付すことを条件に5月の生涯学習支援委員会及び放送番組制作委員会での審議を了承（5月1日に別紙作成依頼）
【4月30日】 メール	制作部からオンライン制作課に協力要請、オンライン教育課は要請を受諾
【5月1日】 メール	企画編成課（放送番組編成制作委員会事務局）から放送管理課（生涯学習支援委員会事務局）に本件の打ち合わせ依頼
【5月8日】 Zoom上にて関係者一同打ち合わせ（企画編成課、放送管理課、制作部、オンライン教育課、滝浦・大橋）	以下の点について、諸部課間で合意 ・事態の緊急性に鑑み、テレビ番組制作に先行してYouTube動画を作成・配信すること ・後日テレビ番組を制作すること ・YouTube動画の収録はウェブ会議システムを用いたりリモート収録で行い、収録と編集にはオンライン教育課が協力すること ・YouTube動画の作成に際しては全てを学内で賄うこと（予算措置なし） ・テレビ番組の制作は可及的速やかに実行するために随意契約で行うこと ・テレビ番組制作に際しては基本的に新撮は行わず、先行作成となるYouTube動画を活用すること
【5月11日】 メール	生涯学習支援委員会で審議するに当たっての事前評価開始に合わせて企画提案書及び添付別紙の最終版を提出
【5月15日】 メール	企画管理課からシリーズを紹介するためのイントロの動画作成の提案（この結果、5～6分の動画が8本、15分程度の動画が1本、イントロの動画1本、の計10本という形で最終確定）
【5月19日】 Zoom上にて	共同通信社による取材（広報課によるプレスリリースに応じる形での取材申し込み）
【5月21日】 2020年度第2回生涯学習支援委員会及び放送番組編成制作委員会	事前評価の結果を踏まえた上で企画提案承認
【5月25日～6月1日】	放送大学YouTubeチャンネルで順次動画配信開始

様々な事務組織の協力・協働があって、はじめて実現できたプロジェクトであることがはっきりと見て取れる。協力して頂いた各部署に深謝申し上げたい。

3.3 動画の作成

一方、教員側は内容面から動画作成の準備を進めていた。4月21日開催の生涯学習支援委員会関連事務打ち合わせに可能な限り間に合わせるべく、4月20日には筆者が出演を依頼したいと考えた教員への協力依頼を開始した。この企画で取り上げたい内容を考えた上

で、2020年度の生涯学習支援委員会及び放送番組編成制作委員会の委員を中心に、2019年度以前に別の委員会で一緒だった教員や他の授業で協働したことのある教員に声を掛けた。反応は筆者の予想以上に良く、翌日には全出演者が決定していた（全コースから1名以上、計8人）。その後、筆者との個別ミーティングを重ねることに加え、5月4日には関係教員全員でミーティングを行った。このミーティングの結果、45分程度のYouTube動画を1本作成するという筆者の当初案から、各教員が専門内容について話す動画はそれぞ

れ5～6分程度とし、それに加えて全員がそれぞれの話す内容の要点を1分半程度でまとめる動画（全体で15～16分程度のもの）を1本作るという案に変更することが決まった（5～6分の動画が8本と、15分程度の動画が1本、合計9本という計画）。また、情報を発信する時機を逸することを何としても避けたかったため、5月中に動画の配信を開始することを目標とすることで、全員の意識が一致した。事務手続きの進捗状況を睨みつつ、5月18日の週に動画の収録を行い、撮影と編集は全面的にオンライン教育課に依頼することで、5月25日に「新型コロナウイルスの流行の中で～放送大学教員からのメッセージ」のイントロ動画の配信にこぎつけることができた¹。

3.3.1 目的・ねらい

企画提案書に記した目的は次のようなものだった。

4月の生涯学習支援委員会／番組編成制作委員会にて提案のあった、新型コロナウイルス感染拡大に対するメッセージを発する緊急の企画として提案。新型コロナウイルスの感染拡大が世界中で止まらない中、日本でも手洗い励行の掛け声、「3密」の回避、外出自粛、緊急事態宣言の発令など、何とか感染拡大を食い止めようとして様々なことが言われている。しかしながら、手に入れ易い情報は表面的なノウハウに焦点が当たってしまい、その背後にある学術的な根拠などが必ずしもきちんと伝わっているとは言い難い。また様々な情報がバラバラな状態で市民に届いてしまっ

ている。未曾有の緊急事態である現在において、感染拡大を防ぎながら、私たちがこの新型コロナウイルス禍とどう向き合っていけばいいのかを考えるための動画を制作し、感染拡大を防ぐためにたった今必要な知識をコンパクトにまとめる形でインターネット配信できる動画を放送大学YouTubeチャンネルに流す。この動画を通して、放送大学の学生が学術的根拠に基づいた知識を得ることを意図するのみならず、広く世間に向けて発信することで日本全体に資することを希求する。

また、「緊急事態宣言下で構想・制作されるという緊急性に鑑み、制作手法・制作体制ともミニマルな形態を極限まで追求する」ことも企画提案書に記されており、「収録はウェブ会議アプリ（Zoom）の録画機能により、画面共有による資料提示などを利用しながら、出演者が一度も集まることなく行」うとされた。動画撮影の際は、全ての回で聞き手役となった筆者は毎回自宅からZoomに接続した。そのため、対談者同士は一度も実際に顔を合わせることなく収録を完了した。

3.3.2 内容

対談形式で5～6分程度のものを8本、全員がそれぞれ1分半程度で要点をまとめたもの（全体で15分程度のもの）を1本、それらを紹介するためのイントロの動画を1本、の計10本の動画を配信した。その内容を以下に記す。

「新型コロナウイルス流行の中で～放送大学教員からのメッセージ～」 企画：大橋理枝（人間と文化） 監修：滝浦真人（人間と文化）	
第0回 「はじめに」 （大橋理枝：人間と文化） 2020年5月25日配信開始【4分54秒】	「新型コロナウイルス流行の中で～放送大学教員からのメッセージ～」のシリーズを紹介すると共に、今回の新型コロナウイルス感染拡大について多角的な視点から見ることの重要性を述べた。
第1回 「新型コロナウイルスとは」 （二河成男：自然と環境） 2020年5月26日配信開始【5分51秒】	新型コロナウイルスそのものについて生物学の視点から考え、ウイルスとは何か、ウイルス感染のしくみ、ウイルス感染への対策などについて解説した。
第2回 「ウイルス感染への対応」 （田城孝雄：生活と福祉） 2020年5月26日配信開始【4分36秒】	ウイルス感染への対応の仕方を公衆衛生学の観点から考え、PCR検査、「3密」の回避、第二波に備えるために必要なことなどについて述べた。
第3回 「社会的な距離をとるということ」 （森 津太子：心理と教育） 2020年5月27日配信開始【5分49秒】	新型コロナウイルス感染拡大を阻止する方法として注目された社会的距離の確保について、社会心理学の観点から考え、ソーシャル・ディスタンスやパーソナル・スペースなどについて述べた。
第4回 「緊急時だからこそ忘れないで欲しい、情報の入手と発信の基本」 （辰己丈夫：情報） 2020年5月27日配信開始【5分42秒】	社会的に不安定な時の情報の扱い方について、情報学の観点から考え、フェイクニュース、インフォデミック、レジリエンス、ユニバーサルデザインなどについて解説した。
第5回 「多様な人びとがおかれた状況への想像力を」 （北川由紀彦：社会と産業） 2020年5月28日配信開始【5分20秒】	日本社会で暮らす多様な人々のおかれた状況への想像力の必要性について、社会学の立場から考え、非常時に顕在化する社会的格差、格差の放置と社会の不安定化、差別の問題などについて述べた。

¹ https://www.youtube.com/watch?v=_E-n_8qQmNI&list=PL0VE9wWQ7mkuIY2H98Va0tv05Y_10GFcY (2020.11.9閲覧)

第6回 「読書のすすめ」 (近藤成一：附属図書館長／人間と文化) 2020年5月28日配信開始【5分57秒】	本を読むということについて人文学的な立場から考え、今回の新型コロナウイルス感染症の拡大をこれまでに流行した他の感染症などと比べることによって得られる視点などについて述べた。
第7回 「運動不足の弊害と運動実施時の注意点」 (関根紀子：生活と福祉) 2020年5月29日配信開始【6分27秒】	外出自粛要請が出ている中で陥りやすい運動不足の弊害や運動実施時の注意点について、運動生理学の立場から考え、身体活動量と健康の関係、安全に運動やスポーツを行うポイント、屋外での運動時に気を付けることなどについて解説した。
第8回 「リスク管理の観点からみたウイルス感染リスクとつきあう生活の姿—まとめにかえて」 (奈良由美子：生活と福祉) 2020年5月29日配信開始【5分58秒】	今回の新型コロナウイルス感染拡大を生活の中のリスクの一つとしてとらえる考え方を、リスク管理の立場から考察し、自らの生活のリスクマネジメントとしてのとらえ方、人間の生活のレジリエンスとしてのとらえ方などについて述べた。
総集編 (大橋・二河・田城・森・辰己・北川・近藤・関根・奈良：全コース) 2020年6月1日配信開始【15分49秒】	新型コロナウイルスの感染が世界中で拡がる中、様々な情報がバラバラな状態で市民に届いてしまっていることを踏まえて、新型コロナウイルス感染拡大について多角的な視野から検討することが重要であると考え、様々な分野の教員からのメッセージを一つにまとめた。

3.3.3 効果

動画配信のタイミングが奏功すると共に、取材してくれた共同通信社による記事が5月24日に配信された結果、この企画に関する記事が地方紙・ブロック紙・

全国紙合わせて28紙に掲載されたこともあってか、動画の視聴回数は予想以上の伸びとなった。また、一部のラジオ番組でも取り上げられたとの情報もあり、反響の大きさが感じられた。

「新型コロナウイルス流行の中で～」パブリシティ掲載一覧（広報課取りまとめ）

番号	日付	分類	氏名・所属SC名	掲載紙等名称	媒体分野	面	概要
1	5/25	放送大学	放送大学	北海道新聞	ブロック紙	20	放送大学がコロナ講義 きょうからネットで
2	5/25	放送大学	放送大学	東奥日報	地方紙	15	コロナ基礎知識、社会問題説く 放送大の有志教員らユーチューブで講義 一般向け、きょうから
3	5/25	放送大学	放送大学	山形新聞	地方紙	20	放送大が緊急抗議開講 きょうから一般向け ユーチューブで教員有志
4	5/25	放送大学	放送大学	徳島民友	地方紙	20	コロ、一般向け講義 ネット上 放送大の有志教員ら
5	5/25	放送大学	放送大学	徳島民報	地方紙	21	新型コロナの緊急講義 放送大の有志教員らユーチューブで きょうから一般向けに
6	5/25	放送大学	放送大学	新潟日報	地方紙	23	新型ウイルス 放送大 一般向け感染症講義 きょうからユーチューブ
7	5/25	放送大学	放送大学	福井新聞	地方紙	22	新型コロナ題材 放送大緊急講義 きょうからネット配信
8	5/25	放送大学	放送大学	下野新聞	地方紙	3	放送大学/きょうから緊急講義 動画投稿サイトで配信
9	5/25	放送大学	放送大学	茨城新聞	地方紙	21	放送大学 新型コロナ公開講義 ネットできょうから 基礎知識や社会問題
10	5/25	放送大学	放送大学	千葉日報	地方紙	17	きょう 放送大ネット緊急講義 感染、再流行対策など解説
11	5/25	放送大学	放送大学	中日新聞	ブロック紙	22	放送大がコロナ講義
12	5/25	放送大学	放送大学	京都新聞	地方紙	22	新型コロナ 緊急講義 流行再燃への対策、情報発信の問題に… 一般向け 放送大教員らネットで
13	5/25	放送大学	放送大学	神戸新聞	地方紙	21	新型コロナ 放送大 一般向け講義 コロナ流行巡り、ネットで きょうから
14	5/25	放送大学	放送大学	山陽新聞	地方紙	22	新型コロナ よりよく知って 放送大が緊急講義 一般向けに教員有志ら きょうから配信
15	5/25	放送大学	放送大学	中国新聞	地方紙	20	放送大が新型コロナの講義 きょうから有志教員ら 一般向け ネットで
16	5/25	放送大学	放送大学	四国新聞	地方紙	16	放送大学 きょう緊急講義 コロナテーマ 有志教員ら 一般向けに
17	5/25	放送大学	放送大学	愛媛新聞	地方紙	4	コロナ 知識や問題講義 放送大きょうから一般向け配信
18	5/25	放送大学	放送大学	山陰中央新報	地方紙	23	放送大 コロナ緊急講義 基礎知識5分で解説 一般向け ネットで

19	5/25	放送大学	放送大学	西日本新聞	ブロック紙	5	一般向け コロナ緊急講義 放送大教員ら
20	5/25	放送大学	放送大学	佐賀新聞	地方紙	2	放送大 きょうから緊急講義 一般向け、動画サイトで
21	5/25	放送大学	放送大学	南日本新聞	地方紙	19	新型コロナ巡る講義配信へ 放送大の有志
22	5/25	放送大学	放送大学	長崎新聞	地方紙	20	新型コロナ 放送大が緊急講義 一般向けに有志教員ら、ネットできょうから
23	5/25	放送大学	放送大学	宮崎日日新聞	地方紙	20	ユーチューブでコロナ緊急講義 放送大有志教員ら
24	5/25	放送大学	放送大学	熊本日日新聞	地方紙	3	コロナ緊急講義、25日から配信 放送大の教員ら 新型コロナウィルス
25	5/25	放送大学	放送大学	沖縄タイムス	地方紙	3	新型コロナきょう緊急開講 放送大有志ら、ユーチューブで
26	5/25	放送大学	放送大学	琉球新報	地方紙	22	コロナで緊急講義 放送大教員ら、きょう配信
27	5/27	放送大学	放送大学	産経新聞	全国紙	14	放送大の有志教員 コロナで一般向け緊急講義
28	5/27	放送大学	放送大学	産経新聞(大阪)	全国紙	12	放送大の有志教員 コロナで一般向け緊急講義

また、動画配信開始後、国からの外国人支援の要請に応えるべく総集編の多言語化を行いたいという打診が総合戦略企画室からあり、動画部分については字幕、スライド部分は翻訳を施して対応することになった。2020年9月29日から英語版とベトナム語版が配信されている²。

4. テレビ番組の制作

6月1日にYouTube動画の最後の1本である「総集編」の配信が開始されたわずか3日後に、制作部からテレビ番組制作に向けての連絡があった。その時に示されたのは下記の条件だった。

1. 講師の説明は基本的にはYouTube素材を使い、新撮はしない。
2. 45分の内容にするため、尺長の調節を行う。
3. 講師のしゃべりの映像、背景、パターンについてはより放送に適したように再編集をする。
4. 番組の進行をナビゲートするため、CG画像・資料映像にナレーションで枠をつける。(アナウンサーを想定、但し大橋の説明コメントを追加する可能性もあり)
5. BGM等は追加して、より視聴しやすくする。
6. 検収は大橋を中心に進める。

基本的には5月8日に合意した範囲内で進めたいというのが制作部の意向だったと理解している。また、本来こちらとしてはそれに対して異論を挟む余地はないはずだった。

しかしながら、YouTube動画用に撮影した映像が果たしてテレビ放送に耐えられるのか、という大きな問題があった。この点については5月8日の関係者一

同での打ち合わせの時点から懸念が表明されていたのだが、この段階で再度その点が大きな問題として見えてきたのだった。

また、新型コロナウイルスの流行に関する最新の研究結果や現状分析に基づいた新しい情報が出るようになり、社会全体での捉え方にも変化が生じつつあった。YouTube動画の撮影から2か月後に放送されるテレビ番組で、YouTube動画をそのまま使ってしまうと、下手をすると内容的に誤解を招きかねない可能性も懸念された。

そこで、放送部と制作部の両方に上記の懸念を伝えたと、若干の新撮部分を加えることを認めてもらうことができた。また、前述の通り番組の制作そのものは学外のプロダクションとの随意契約で進めることになっており³、その制作会社ともすり合わせを行った結果、YouTube動画作成の際に提出した企画提案書の中の「YouTube動画を活用したテレビ番組」の部分は「総集編」の動画をそのまま流すことで実現することとし、1日で撮り切れる範囲での新撮部分を「演出」として入れることで、合計45分のテレビ番組を制作することが認められた。

6月16日にこの方針が決まり、すぐに新撮部分に出演してほしい教員に出演依頼を出し、4日後には全員の承諾を得ることができた。YouTube動画は自前のウェブカメラとヘッドセットで自宅からZoomに繋いで撮影することができなくなかった(但し音質の劣化やカメラワークの未熟さが目に付きはする)が、今回のテレビ収録は流石にリモートで行うわけにはいかず、7月20日に放送大学の制作スタジオで実際に顔を合わせて行った。番組編集と通常の授業番組同様の内容の確認などを経て、8月1日に初回放送を迎え、以降計10回ほど放送された。

内容は次の通りである。

² 英語版：https://www.youtube.com/watch?v=_E-n8qQmNI&list=PL_0VE9wWQ7mkuIY2H98Va0tv05Y_10GFcY&index=1
ベトナム語版：https://www.youtube.com/watch?v=22U3Gn9IgrC&list=PL_0VE9wWQ7mkuIY2H98Va0tv05Y_10GFcY&index=2 (いずれも2020.11.9閲覧)

³ 随意契約で制作を委託できなかった場合は入札となるが、そうすると3か月近くの時間が必要となるため、今回のように早く番組を作りたい場合は随意契約が妥当であるという判断のもとに、以前にも生涯学習支援番組を制作したことがある業者との随意契約が結ばれていた。

新型コロナウイルス流行を越えて～放送大学教員の視点 モデレーター：大橋理枝(人間と文化)、滝浦真人(人間と文化)	
1. はじめに～4月からの振り返り	滝浦・大橋の対談
2. 新型コロナウイルスの流行の中で～放送大学教員からのメッセージ	YouTube動画総集編の挿入、それに対する滝浦・大橋からの補足
3. 一斉休校から見えた学校の存在意義	岩永雅也（放送大学副学長／心理と教育）・大橋の対談
4. コロナと心	大山泰宏（心理と教育）・滝浦の対談
5. 新型コロナウイルスとレジリエンス	奈良由美子（生活と福祉）・滝浦の対談
6. まとめ	滝浦・大橋の対談

この番組についても共同通信社の記事が配信され、幾つかの新聞が取り上げてくれた。また、YouTube動画作成とテレビ番組制作とを合わせて、大学の窓の9月号でも取り上げられた。テレビ番組そのものは放送大学YouTubeチャンネルでの配信は行われていないが、大学の窓は231チャンネルでの放送期間が終わった後も放送大学YouTubeチャンネルで視聴可能になっている⁴。

5. 教養学部に必要な横断的連携

5.1 専門分野間の横断的連携

今回の新型コロナウイルスの流行に関するYouTube動画作成とテレビ番組制作に関する大きなポイントの一つは「分野横断」にあると考える。YouTube動画は全コースの教員の参画を得たし、テレビ番組も敢えてコースを跨ぐ形で出演者を選んだ。

放送大学は教養学部教養学科のみの単科大学である。それは即ち、森羅万象を網羅しているとはまでは言わないまでも、かなり多彩な専門をもった教員が同じ学科に所属しているということの意味する。このこと

は放送大学の最大の長所であり、今回の新型コロナウイルスの流行に際しての情報発信のみならず、あらゆる場面で大きな力になるはずだし、もっと力にしていなくてはいけないかと確信する。

とはいえ、この考え方は昔から教員間では共有されているように思う。現在開講中の「総合科目」は「学際的な知識、分析手法を身に付け、複数の学問領域から異なる視点に立つ分析を通じて、単一の学問領域内での学習を超えた、教養学部ならではの複眼的な視点を養うこと」⁵を目標にするとされており、2020年度第2学期は16科目が開講されている。以前のカリキュラムでは「主題科目」という分類の科目が同様の趣旨で開講されていた。現在は放送授業科目については主任講師と分担講師との合計が5人以内であることを原則とする旨の規定があるが、それを越える人数の教員が関わっている科目もある。関わる教員が多ければ多いほど良いとは限らないが、多角的な観点を打ち出すためには多分野に跨る形での学術的内容の提示は意義があるだろう。

そしてこのような形で分野横断的な観点を示すことができることこそ、教養学部教養学科のみの単科大学である放送大学が示すことのできる「教養」の姿ともなり得るのではないか。「教養」を定義することは極めて困難であることは言を俟たないが、一つの具体的な姿を示すとしたら、分野横断性をキーワードとするような形も十分想定できるのではないかと考える。最も大規模な形でそれを実現したのが、多分野に跨る15名の教員が参画して「放送大学がもつ知見を危機の時代を共に生きる幅広い皆様にお伝えし、科学的に理性的に一緒に考える機会を提供することが、我々に課せられた役割であるとの思いのもと」に制作された「危機の時代に考える」であろう⁶。

また、筆者は全コースの教員の協力を得て「教養で読む英語」というオンライン科目を2019年度から開講している。この科目の受講者アンケートでは、授業中

「危機の時代に考える」 新型コロナウイルス感染問題の拡大の中で、今日の社会の危機をさまざまな角度から考えるシリーズ【全15回】 ⁷	
第1回 「講義のねらい 履修の仕方」 (來生新：放送大学学長／社会と産業、近藤成一：附属図書館長／人間と文化)	主任講師をつとめる來生新学長が全15回の講義全体をつらぬく基本的な視点を語り、日常性と危機の関係を日常性からの離脱の程度に応じて、ゆらぎ、よろめき、離脱という3類型で考える。
第2回 「新型コロナウイルス感染症とはなにか」 (田城孝雄：生活と福祉)	厚生労働省が作成した『新型コロナウイルス感染症診療の手引き』をもとに、一般の方にも分かるように、新型コロナウイルス感染症について解説すると共に、1年以上掛かるワクチン普及まで、感染拡大を防ぐために、どの様に過ごせばよいか説明する。

⁴ <https://www.youtube.com/watch?v=QwjdzfsUjQ> (2020. 11. 9閲覧)

⁵ https://www.ouj.ac.jp/hp/gakubu/saihen_h28.html (2020. 11. 9閲覧)

⁶ 新型コロナウイルス感染拡大を受けて2020年度第1学期の面接授業が全面開講中止となり、その代替措置として7月に専任教員による授業が70科目ほど開講された際に、放送番組を利用した授業科目を開講するために制作されたもの。制作業者を入れることなく、動画の撮影や編集まで全て教員が行った前代未聞の画期的な放送番組であった。

⁷ <https://www.youtube.com/playlist?list=PL0VE9wWQ7mksJVQJNU02jVBiwNNwoh50A> (2020. 11. 9閲覧) 各回の内容はそれぞれの動画サイトの紹介ページから抜粋した上で一部文言を変更。

第3回 「危機と社会—ペストは中世ヨーロッパ世界をどう変えたか」 (河原温：人間と文化)	疫病と社会の関係を歴史的にとらえてみるという視点から、14世紀のヨーロッパを襲ったペストによる大量死が、当時の人々にどのような影響を及ぼしたのかを考える。
第4回 「生物多様性の危機とその管理」 (加藤和弘：自然と環境)	生物多様性の意義を概観した上で、生物多様性の危機をもたらした要因を紹介し、生物多様性の危機への対応の現状について要因ごとに説明すると共に、生物多様性の危機の本質は人間の利害の対立にあることを論じ、共通理解の促進と解決策の検討のための手段としてシミュレーションとコミュニケーションの要素を盛り込んだゲームが持つ可能性を取り上げる。
第5回 「防災インフラ整備とソーシャルキャピタル」 (池田龍彦：放送大学副学長／社会と産業)	海からもたらされる津波、高波、高潮などの脅威に対抗し、人命と財産を護るために防災インフラを整備することの重要性は言うまでもないが、災害に強い強靱な社会を構築し、想定を超えた外力から人命を護るためにはソーシャルキャピタルを普段から醸成しておくことが必要であることなどについて述べる。
第6回 「地球環境の危機：緩和策と適応策」 (岡田光正：放送大学副学長／社会と産業)	人間活動の影響による地球の温暖化とそれに伴う気候変化という地球環境の危機に対して、温室効果ガスの削減をはかるのは緩和策だが、それによって急速な改善が期待されるわけではなく、気候変動による被害を最小限にする適応策も不可欠であることについて考える。
第7回 「保険制度の活用によるリスク管理」 (李鳴：社会と産業)	新型コロナウイルス感染症の大流行を契機に、改めて人生のリスク管理を「日常生活に潜むリスクとリスク管理の必要性」「社会保険と民間保険との比較」「民間の保険契約におけるリスクと対応」から考える。
第8回 「個人のリスク管理と社会の危機管理—行政による危機管理」 (來生新：放送大学学長／社会と産業)	新型コロナウイルスの蔓延という今回の状況を法的にどうとらえるかを考え、危機管理が「私的な管理」「社会的管理」「国際的管理」の広がりを持つことを論じた上で、社会全体としての危機を管理する行政法（公法）的視点での法現象の考察を行う。
第9回 「国際社会の危機と危機管理—新型コロナウイルス流行を中心として」 (柳原正治：社会と産業)	新型コロナウイルス感染症が地球規模で流行しているという国際的な危機に際して、個々の国家と国際機関がどのように対処しているのか、そこにはどのような法的問題があるのかについて述べ、ダイヤモンド・プリンセス、出入国管理、WHOの役割などのトピックを取り上げる。
第10回 「子どもの危険と安全—日常に潜む危機とその対策」 (岩永雅也：放送大学副学長／心理と教育)	子どもたちの日常生活に潜む危機とその現状、そして子どもたちの安全を目指してとられる公的私的な種々の対策について、具体的な事例を交えながら解説し、考察していく。
第11回 「学校の危機管理と政策課題—学校の働き方改革及び9月入学・始業の論点を中心に」 (小川正人：心理と教育)	新型コロナウイルス禍の下での学校教育の課題を考え、新型コロナ禍の下で児童生徒の学びをどう保障するか、教職員の安全・健康を確保していく取組み、新型コロナ禍による長期休校等を背景に急浮上した政府の「9月入学・始業」案の論点整理とその政策課題を検討する。
第12回 「本当の危機とは何か—メタ認知の観点から」 (高橋秀明：心理と教育)	認知心理学における「メタ認知」という概念（自分の認知プロセス自体を監視し制御する心の仕組みや働きのこと）からコロナ災禍について検討していくことを通して、「本当の危機とは何であるか」を考える手がかりを見つける方途とする。
第13回 「リスク管理とレジリエンス」 (奈良由美子：生活と福祉)	リスクを小さくし、さらには危機を乗り越えるにはどうすればよいかを考え、リスクをゼロにすることは不可能であるという現実があるなかで注目されているレジリエンスという概念の意義について述べる。
第14回 「文学と危機—カミュ『ペスト』を中心に」 (野崎敏：人間と文化)	いま世界で“再発見”されているカミュの小説『ペスト』（1948年）を取り上げ、カミュの生涯を概観したのち、この作品でカミュが、危機のただなかにある人間と社会の姿を捉えつつ、どのような新しい生のあり方を提起しているのかを考える。
第15回 「危機の中で社会と我々のあり方を考える」 (魚住孝至：人間と文化)	技術の本質を「総かり立て体制」と論じたハイデガーの思索を中心に考え、現代の危機は、科学技術による産業社会の巨大化に基づくところが大きく、有限なる地球で、今、ここに生きることを省みて思索することにより、現代文明の転換を準備することを述べる。

に行っている英文講読に用いる文章が様々な分野に亘ることについての好意的な評価が目立って多い。受講者によるアンケートなので回答者に偏りがあることは言うまでもないとしても、それでもこのような声が挙がるということ自体、放送大学の学生は分野横断的な知識を肯定的に評価する素地はあると言えよう。そのことを考えると、分野横断的な方向性を打ち出すことがもっとあって良いのではないかと考える。

5.2 事務部署間の横断的連携

「新型コロナウイルス流行の中で」の作成・配信に当たって決定的に重要だったのは、可能な限り早く情報を発信するということであり、YouTube動画という手段を選んだのは放送大学が有しているメディアの中でそのために最適なものがYouTubeチャンネルだったからだった。結果的にはテレビ番組として作られたものを動画配信するという形を取らない初めての

YouTube動画となったが、この動画の作成と配信を可能にしたのは、異なる部署を跨いで事務方の協働が実現できたからに他ならない。先に詳述した通り、かなりの数の部課（放送管理課、企画編成課、制作部、オンライン教育課、広報課、戦略室）がこのプロジェクトに様々な形で関わるようになったが、それぞれの課からできる限りの協力を得たと思う。この点については心から感謝申し上げたい。

と同時に、様々な部課がその枠を超えて協働することができれば、放送大学にはこれまで以上に様々な可能性が拓けるのではないかと感じる。例えば今後テレビ放送を前提としない形でのYouTube動画での情報発信ができるようになれば、これまでは不可能に近かった迅速な情報提供が、一部ではあっても実現できる可能性がでてくる。また、膨大な制作費をかけなくても時宜に叶った情報を提供できる方途ともなり得る。今回の新型コロナウイルスの流行に関する情報発信に対して反響があったということは、これに類するような時宜に叶った情報の提供への需要があることを示していると考えられるのではないだろうか。

勿論放送大学学園法の「放送等による授業を行う」という文言の遵守は必要だろうが、「授業」ではない形での情報発信ももっと積極的に行っても良いのではないか。勿論、現状でこれが実現できていないのは、きっと大きなハードルがあるからだろうと思う。それでも、多部署が協働することでこそ、そのハードルを取り除くことが可能になるのではないだろうか。今回の協働によって生み出すことができた成果を、是非ポジティブな結果として受け止め、今後の協働態勢に繋げてほしいと願う。

6. おわりに

放送大学YouTubeチャンネルで配信した10本の動画の中で、視聴回数が最も多いものは2020年11月5日の時点で1万回を越えており、最も少ないものでも2400回を越えている。この視聴回数は決して取るに足りないものではないといえるだろう。テレビ番組の視聴回数は分からないので、YouTube動画の視聴回数をこのプロジェクトへの反響の目安と考えるのであれば、「この動画を通して、放送大学の学生が学術的根拠に基づいた知識を得ることを意図するのみならず、広く世間に向けて発信することで日本全体に資することを希求する」というYouTube動画作成の目的は、

多少なりとも達成できたと考えても良いように思う。

また、2020年度第1学期の面接授業が全科目中止になったことに対する代替措置として実施が決まったZoomを使った講義やオンデマンド配信型の講義を作成する際には、このYouTube動画作成に関わった教員にとってはこの経験が役に立ったし、教員側で得られた気付きを取りまとめて授業作成の際の参考資料として提供し他の教員との共有を図った。目的が異なるもの間で情報を共有したという点で、これも一つの実験的な動きだったと言えるだろう。

更に、このYouTube動画の作成は教員以外にも様々な形で資することになったと聞く。この企画で放送大学初の遠隔収録を実現できたことは、その後のオンライン授業の収録やラジオ科目の収録に資する知見を提供することに繋がったとのことである。また、例年は対象者を集めて行っていた新規採用者研修が、今年度は映像配信で行われるに当たり、理事長や学長の配信用映像を制作する際にもYouTube動画作成の手法が活用されたようだ。これらの例からも部署を越えて今回の企画から得るものがあったことが分かる。

そしてもう1点、決定的に重要だったと思うのは、この先例のないプロジェクトを実現するに当たって教員側と事務側がこれまでになかったような形で協力し合えたということである。この教員／事務職という立場を超えた連携こそが、この企画で培うことができた最も分野横断的な連携であり、奏功した連携だったと言えるだろう。

一方、教員にとっても事務方にとっても、今回の動画作成やテレビ番組制作は仕事量としては純増だったのは間違いない。それでもそこから得られたものの大きさを考えれば、取り組む意義はあっただろう。但し、教員にも事務方にも多少なりとも余裕がなければ、このような仕事の純増を吸収することはできない。変わりゆく社会情勢に適切に対応していくためにはこれまでに前例のない新しいことに取り組んでいく必要があるのだから、新しいことを企画するために、そしてそれを実行するために、教員側にも事務方にも、今少しのゆとりが得られることを望む。「教養学部教養学科」という1学部1学科のみの単科大学⁸である放送大学の存在意義を考えると、分野横断的な連携とそれを実現するためのゆとりは、今後ますます重要になって来るのではないだろうか。

(2020年11月9日受理)

⁸ <https://www.ouj.ac.jp/hp/gakubu/course.html> (2020.11.9閲覧)